

新設された大規模の某一貫製鉄所において見られる如く、LD 転炉の大型化並びに全く平炉なしの転炉のみによる製鋼設備の傾向と相俟つて、今後周到な計画によつてこれが育成完備を図るならば、上記長期振興計画に示された LD 純酸素転炉による 65% 生産もその実現が十分に期待し得るものと信ずる。

その昔、北筑洞海湾の片ほとり枝光村(後の八幡)に落

された種子の芽生ベセマーの若木が、東下りして六郷の川辺川崎渡田に移し接がれてトーマスの樹となり、今や水江から戸畑、輪西、千葉から、尼崎、広畑、小倉、神戸に、更に和歌山、名古屋と津々浦々まで LD 純酸素転炉の花盛り、まさに日本鉄鋼業の誇らしき旗手たらんとしている。半世紀を回顧して感慨まことに無量なるものあり、敢て秃筆を呵する所以である。

(正会員・元評議員)

回 顧 と 展 望

田 畑 農 夫

明治 44 年郷土に秋田鉱山専門学校が新設され、私は第 1 期冶金学科卒として大正 3 年三菱合資会社に入社した。当時三菱は朝鮮黄海道鉄鉱源と平壤無煙炭を主原料として製鉄所を兼二浦に新設すべく、河村驍博士を主班として計画されつつあつた。私は鉱専の海外進出第 1 号である。先づ技術習得のため八幡製鉄所に外来研究員として同年 7 月赴任した。その頃は東田第 4 高炉が建設中であつた。鉄鋼協会は翌年創立し、最初の会員となり、今や 50 周年を迎える幸運を得たのである。兼二浦には大正 6 年から昭和 13 年に至る迄三菱製鉄から引続き日本製鉄の技師として製鉄部門を担当した。その間褐鉄鉱単味の製鉄法を確立し、また普通銑から低磷銑の製造法を研究開発、炉壁煉瓦の侵蝕に対処し、炉体全部を強制冷却して成品ベースに乗せることができた。当時大宝無煙炭の微粉吹込を行つたが不成功におわつた。昭和 12 年日支事変勃発以来軍の要請によつて北支製鉄の調査団(中松日鉄副社長が主班)の一行に加わり、満州から北支、河北、河南、山西、蒙疆等生々しい戦場を視察した。北京西郊に石景山製鉄所あり、工事半ばにて中止されてあつたが、日鉄及興中公司協力の軍管工場として再出発に決定、その所長として同 13 年 4 月赴任し、同年 10 月平生経済最高顧問、北支総司令官臨席のもとに第 1 高炉火入式を挙行した。その後北支製鉄所設立のため、北京大使館の

委嘱によつて立地条件その他を調査立案した。昭和 18 年北支製鉄会社が創立されたので、日鉄に復す。その後北支那開発、大東亜省の囑託或は社命直命によつて海外製鉄所の技術指導に當つていた。昭和 20 年風雲急を告ぐるに當り、京城事務所の技師長を命ぜられ、東京が焦土化された翌朝出発したが、間もなく終戦となり、引揚者となる。回顧すれば人生の大半はアジア大陸の製鉄業の開発に奉仕した。今日海外の情報によると兼二浦、石景山製鉄所は何れも近代化され、数百万 t 級の大製鉄所に拡張せられつつある。もつて瞑すべきか。終戦後はパージ、昭和 21 年 10 月より秋田大学の教授として鉄冶金に明け暮れること 13 年、停年後は大阪製鋼の相談役、同 38 年末引退す。今や本邦の製鉄業は基礎産業として総力を挙げて拡充を計つた。昭和 39 年前半期の成績は前年の同半期に比し、生産量は世界第 3 位、生長率は世界最高であり、本邦の輸出ブームに乗る鉄鋼の比重は増大しつつある。鉄鋼会社の資本費原料依存率は他国に劣るも、生産の合理化、技術の向上の賜と関係各位に深甚の敬意を表す。申す迄もなく技術革新は刻々進展する。今後の研究部門の強化を確立し、国内の技術提携の円滑化、また応用研究の早期実現は幹部責任者の英断に待つものが多いと確信する。本邦の技術が各国に主導権を獲得する日の近からんことを切望するものである。

(正会員・元評議員)

回 顧

田 村 宣 武

鉄鋼協会が創立以来年毎に目覚ましい発展をつづけ、茲に 50 周年を迎えたことは誠に同慶の至りである。顧みると、私が協会に入会してからも既に 43 年にもなる。思えばこの長い間協会のお世話になり、今もなおその恩

恵に浴していることは全くありがたい次第である。ところで、この長い間これというお手伝いもできなかつたが、只一つ印象に残つておるのは戦争末期の協会のことである。或る日俄国一先生が私を呼ばれて、戦局がどうも面